

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

最後の決断

庄屋の彌兵衛は、悲しんだり嘆いたりなどしていられたなかった。すっかり気が抜けたようになってしまった村人たちを励まし、どこから手を着けて良いか分からぬような村の中を一日も早く、とにもかくにも、村人たちが住めるようにしなくてはならなかった。

幸い被害を免がれた彌兵衛の家の米蔵や道具蔵は、村人たちに開放され女衆らによる炊き出しがなされていた。

彌兵衛の母サト、妻のクニ、娘のゆうは、甲斐甲斐しく女衆に指示を出し、村人たちの世話をした。

彌兵衛は松江藩に緊急災害復旧工事の願いを出したが、この時の災害は日古村だけに留まらず、出雲地方全域が酷い損害を被っていたのだ。出雲私史は、このときの災害を「男女、溺死した者五十人、人家の流出は、四千百五十七戸」と伝えている。

松江藩は被害を受けた農民たちに「地平米」と呼ばれる米を支給し、復旧に努めさせたと伝えられる。彌兵衛から出された災害復旧の願いは、許可の下りないまま日が過ぎた。

無気力で無表情な村人たちの顔を見る度に彌兵衛は心が痛んだ。

「このまま沙汰が有るまで待っていたら、小さな村の復旧工事など、百年も先のことになってしまつたらう」



画 寺戸良信

彌兵衛の苦悩は日に日に深まり、眠れぬ夜が続いた。彌兵衛は、じっとしていられず、松江藩に出向き、何度も何度も掛け合ったが「彌兵衛の願いを叶えたいのは山々なれど、今の松江藩には、總ての村の被害復旧の工事をする財力も器量も無い。許せ、彌兵衛」

重臣に、そう言われると、事情が解るだけに、それ以上の無理は言えなかった。

彌兵衛の苦悩は、妻のクニにも痛いほど伝わっていた。眠れぬ夜が続いていたのも、松江藩に出向く度に肩を落として帰って来るのも、彌兵衛から何も聞かずとも、クニには夫の心情が良く解った。特に、このごろの彌兵衛の様子にはただならぬ心配が漂っているのをクニは見逃さなかった。

「旦那さま、お役目のことに私が口を差し挟む気は、毛頭ございませんが、お体のお具合が優れないのではないかと心配しております。お疲れが溜まっているのではございませんか？」

「うむ」

彌兵衛は重い返事をするど、いつとき黙り込み、そして、重い口を開いた。

「のう、クニ。いずれ家族の者には言い渡しておかなくてはならぬと思っておったことが有る。だが、なかなか最後の決断がつかなくてな……」